

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 98

6/21 2004

目 次

日本中東学会第 21 回年次大会、ふたたび民博で.....	1
理事会・総会報告.....	2
第 20 回年次大会報告.....	7
日本中東学会国際ワークショップ報告.....	22
第 8 回公開講演会「中東における紛争と平和構築」.....	33
アジア中東学会連合(AFMA) 第 5 回韓国大会について.....	34
AJAMES 第 20-2 号投稿原稿の締め切りについてなど.....	35
「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」の 編纂事業について.....	36
寄贈図書.....	37
2005 年度会費納入のお願い.....	37
事務局より.....	37

日本中東学会第 21 回年次大会、ふたたび民博で

日本中東学会は、1985 年 4 月に設立された。来年（2005 年）学会設立 20 周年をむかえることになる。1986 年 4 月には、国立民族学博物館において第 2 回年次大会が開催されている。20 周年の節目にあたって、国立民族学博物館としては 2 度目の年次大会をおひきうけすることになった。

設立趣意書によれば、日本中東学会は「地域研究としての中東研究の組織化」を促進する役割をになっている。20 年の歳月をへて、この役割をかなりな程度まではたしてきたといえる。一方では、まだ不十分な点や見直すべき部分もあることは事実であろう。要は、ひとつの節目をむかえて、歴史と現在をふまえ

ながら未来へむけた道筋を模索する作業が必要になってきている。

現在、大阪、京都、神戸などの学会員を中心に実行委員会をたちあげ、20周年の節目にふさわしい年次大会の企画案を検討中である。年次大会の企画案について会員の皆様からの積極的なご提案があれば、ぜひ実行委員会までご一報いただければとかがえている。

2005年5月14～15日の年次大会に、多数の会員の皆様が参加されることを期待している。
(第21回年次大会実行委員長 松原 正毅)

開催日時：2005年5月14日(土)～15日(日)

開催場所：国立民族学博物館(大阪府吹田市)

実行委員会

委員長：松原正毅(国立民族学博物館)

副委員長：臼杵陽(国立民族学博物館・地域研究企画交流センター)

事務局長：西尾哲夫(国立民族学博物館)

委員：山中由里子(国立民族学博物館)、江川ひかり(立命館大学)、小田淑子(関西大学)、菊池忠純(四天王寺国際仏教大学)、小杉泰(京都大学大学院)、高階美行(大阪外国語大学)、中田考(同志社大学)、中村覚(神戸大学大学院)、堀直(甲南大学)

例年通り、第2日目は研究発表とする予定です。研究発表の応募期間は2004年9月～11月となります。なお、応募の際、報告タイトルに要旨(日本語200字、欧文の場合100 words程度)を付けてください。応募の詳細についてはニューズレター次号や学会メーリングリスト、ホームページでもお知らせします。

【連絡先】 日本中東学会第21回年次大会実行委員会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館

臼杵陽研究室 電話 06-6878-8340 E-mail: jameet@idc.minpaku.ac.jp

理事会・総会報告

【2004年度第1回理事会報告】

5月8日(土) 明治大学駿河台キャンパス研究棟第3会議室において第1回理事会が開催されました。概要は以下の通りです。(議題の詳細については3～5ページの総会報告をご参照ください。)

出席：小杉泰会長、臼杵陽、飯塚正人、大塚和夫、小松久男、酒井啓子、長沢栄治、羽田正、林佳世子、三浦徹、湯川武の各理事
事務局より帯谷知可会員、森尚子

[議題]

1. 2004 年度事業計画について
2. AJAMES の 2004 年度編集計画について
3. 「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」について
4. 日本学術会議における活動について（特に地域研究学会連絡協議会における活動について）
5. 国際交流委員会の活動について
6. 2003 年度決算報告、2004 年度予算案
7. 会員動向
8. 2005 年度年次大会について
9. その他（地域研究コンソーシアムへの加盟について）

【第 20 回年次総会報告】

日時：2004 年 5 月 8 日(土)

場所：明治大学駿河台キャンパス リバティ・ホール

出席者：80 名、委任状 145 名、計 225 名（定足数 131 名）

大稔哲也会員の司会により、議長として鹿島正裕会員、書記として宇野昌樹、塩尻和子両会員、議事録署名人として谷口淳一、平井文子両会員が選出されました。理事会によって提出された以下の議案が審議され、いずれも採択されました。

1. 2003 年度事業報告（臼杵陽）
 - ・ 第 19 回年次大会の開催（2003 年 5 月 10 日～11 日、立命館アジア太平洋大学）
 - ・ 第 7 回公開講演会「世界史のなかのイスラーム」の開催（2003 年 11 月 1 日、一橋記念講堂、文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による）
 - ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 19-1 号、第 19-2 号の編集・出版（日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による）
 - ・ 北米中東学会年次大会におけるパネルの組織および研究報告（国際交流基金・中東交流事業の助成による）
 - ・ 国際ワークショップ Changing Knowledge and Authority in Islam の開催（2004 年 3 月 25～26 日、東京大学山上会館、国際交流基金・中東交流事業の助成および財団法人東洋文庫の協賛による）
 - ・ 韓国中東学会年次大会への参加。
 - ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」のためのアンケートによる業績調査の実施、ならびに学会ホームページにおける公開・更新。（日本学術振興会科学研究費補助金・成果公開促進費の助成による）

- ・ 地域研究学会連絡協議会の発起大会（7月6日）への参加、幹事学会として同協議会の活動に参加開始。
 - ・ ニュースレターの発行（和文3回[総頁数70頁]、英文1回[20頁]）。
 - ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報（2003年度配信207件、登録者数442名）。
 - ・ AJAMESの海外研究機関への発送。
 - ・ 会員の増減：入会者38名（正会員：14名、学生会員：24名）退会者14名/うち物故者1名。結果、2004年4月1日現在の会員数は644名（正会員518名/うち海外在住27名、休会者16名；学生会員126名/うち海外在住5名、休会者1名）となった。賛助会員はゼロとなった。
2. AJAMES第19-1号、第19-2号編集報告（長沢栄治）
- ・ 19-1号および19-2号が予定通り刊行された。外国語率は全体として70%であった。
3. 2003年度決算報告（臼杵陽）および監査報告（高階美行）
（決算については6ページの表を参照）
- ・ アルバイト謝金は大幅に節減できた。
 - ・ 消耗品費の大幅超過は主に事務局移転に伴う封筒印刷費による。
 - ・ ニュースレター発行費の大幅超過は主に、会員数の増加に伴い、会員名簿およびニュースレターの発行部数・頁数が全体として増加したことによる。
 - ・ 繰越金はトータルで2002年度に比べ約20万円増であった。
 - ・ 高階美行監事より、江川ひかり監事とともに会計監査を行い、決算につきすべて適正であったとの報告があった。
4. 2004年度事業計画一般について
臼杵陽事務局長から概要説明の後、必要に応じて各担当理事から報告が行われた。
- ・ 第20回年次大会の開催（2004年5月8日～9日、明治大学駿河台キャンパス）。
 - ・ 第8回公開講演会「中東における紛争と平和構築」の開催（2004年10月30日、一橋記念講堂）。（331°-ジに関連記事）
 - ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第20-1号、第20-2号の編集・出版を行う（日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける）。
 - ・ アジア中東学会連合会（AFMA）第5回大会（10月15～17日、韓国）への会員等の派遣、ならびにアジアの中東研究ネットワーク構築の推進（国際交流基金・中東交流事業の助成を申請予定）。（341°-ジに関連記事）
 - ・ 第19回国際宗教学宗教史会議世界大会（2005年3月24～30日）におけるパネルの組織。

- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」アンケート調査の継続および新規業績調査の実施、学会ホームページにおける公開・維持・更新。また英語版の公開。(日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける) (361°-ジ°に関連記事)
 - ・ ニュースレターの発行。
 - ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報。
 - ・ 海外の関連学会との交流の促進。
 - ・ AJAMES の海外研究機関への普及の促進。
 - ・ 第 11 期役員選挙の実施。
 - ・ その他(地域研究コンソーシアムへの加盟)
5. AJAMES 第 20-1 号, 第 20-2 号編集計画(長沢栄治)
- ・ 岡野内正、酒井啓子、吉村慎太郎各編集委員が、水島多喜男、青山弘之、松本弘各会員に交代する。
 - ・ 第 20-2 号の投稿締め切りを 1 ヶ月早め、8 月末とする。(351°-ジ°に関連記事)
6. 2004 年度予算案(臼杵陽)(予算案については 6 ページの表を参照)
- ・ 会則細則で除名対象とされる 3 年以上の会費滞納者の会費は今後、年会費収入予算には計上しないこととする。(予算と決算の大幅なずれをなくするためであるが、滞納会費の納入督促は行う。)
 - ・ AJAMES、データベース、公開講演会については科学研究費補助金による助成金がある。
 - ・ AJAMES 広告費収入は以後年 2 冊分となるので減額計上となる。
 - ・ 事務局費のうち、2003 年度の実績からアルバイト謝金は 5 万円減額計上とする。
 - ・ 事業費に新たに大会会場費の費目を設定し、20 万円を計上する。
 - ・ 事業費のうち、ニュースレター発行費を増額、AJAMES/NL 発送費を第 4 種学術刊行物の認可にともない減額計上とする。

小杉泰会長からの挨拶の後、以上をもって総会は閉会されました。

2003年度決算

収入	03年度予算	03年度決算
2002年度よりの繰越金	3,257,520	3,257,520
年会費	6,726,000	3,964,000
正・学生会員	6,726,000	3,964,000
1996年度以前未納分	0	0
1997年度分	16,000	0
1998年度分	40,000	0
1999年度分	80,000	16,000
2000年度分	180,000	24,000
2001年度分	240,000	36,000
2002年度分	516,000	152,000
2003年度分	1,356,000	868,000
2004年度以降分	4,248,000	2,868,000
賛助会員	50,000	0
その他	1,390,100	1,366,416
科研費出版助成金	1,100,000	1,100,000
利子	100	36
AJAMES販売代金	200,000	168,840
AJAMES広告費	70,000	75,000
海外郵送費実費	20,000	12,540
その他	0	10,000
収入合計	11,373,620	8,587,936
公開講演会科研費	550,000	550,011
中東研究文献DB科研費	3,100,000	3,100,073
MESA大会派遣国際交流基金助成	1,660,000	1,571,117
国際ワークショップ国際交流基金助成	2,394,000	2,171,961

2004年度への繰越金内訳

郵便振替口座(2004/3/31現在)	2,972,381
三井住友銀行口座(2004/3/31現在)	330,866
現金	137,097

2004年度予算案

収入	04年度予算	03年度予算
2002年度よりの繰越金		3,257,520
2003年度よりの繰越金	3,440,344	
年会費	6,960,000	6,726,000
正・学生会員	6,960,000	6,676,000
1997年度分	0	16,000
1998年度分	0	40,000
1999年度分	0	80,000
2000年度分	0	180,000
2001年度分	0	240,000
2002年度分	364,000	516,000
2003年度分	624,000	1,356,000
2004年度分	1,492,000	4,248,000
2005年度分	4,480,000	0
賛助会員	0	50,000
その他	1,470,100	1,390,100
科研費出版助成金	1,200,000	1,100,000
利子	100	100
AJAMES販売代金	200,000	200,000
海外郵送費実費	20,000	20,000
AJAMES広告費	50,000	70,000
収入合計	11,870,444	11,373,620
公開講演会科研費	550,000	550,000
中東研究文献DB科研費	3,500,000	3,100,000

支出	03年度予算	03年度決算
事務局費	1,360,000	911,955
アルバイト謝金	950,000	592,410
通信費	50,000	23,160
消耗品費	100,000	182,650
会議費	100,000	38,280
交通費	100,000	32,000
振込手数料	10,000	7,115
事務局移転費	50,000	36,340
事業費	4,550,000	4,235,637
大会開催費	300,000	300,000
AJAMES19号編集費	250,000	206,560
欧文校閲費	300,000	237,293
同印刷製本費	2,300,000	2,204,979
編集委員会交通費	100,000	27,040
ニュースレター発行費	300,000	432,967
AJAMES/NL発送費	550,000	528,263
AJAMES海外発送費	100,000	101,210
選挙費用	0	0
国際交流費	100,000	49,320
インターネット広報費	200,000	127,875
AFMA	0	0
公開講演会広報など	50,000	20,130
支出合計	5,910,000	5,147,592
2004年度への繰越金	5,463,620	3,440,344
総計	11,373,620	8,587,936

支出	04年度予算	03年度予算
事務局費	1,260,000	1,360,000
アルバイト謝金	900,000	950,000
通信費	50,000	50,000
消耗品費	100,000	100,000
会議費	100,000	100,000
交通費	100,000	100,000
振込手数料	10,000	10,000
事務局移転費	0	50,000
事業費	4,950,000	4,550,000
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	200,000	0
AJAMES20号編集費	250,000	250,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,300,000	2,300,000
編集委員会交通費	100,000	100,000
ニュースレター発行費	400,000	300,000
AJAMES/NL発送費	500,000	550,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	50,000	0
国際交流費	100,000	100,000
インターネット広報費	200,000	200,000
WOCMES	0	0
AFMA	100,000	0
公開講演会広報など	50,000	50,000
支出合計	6,210,000	5,910,000
2004年度への繰越金		5,463,620
2005年度への繰越金	5,660,444	
総計	11,870,444	11,373,620

第 20 回年次大会報告

【大会プログラム】

5月8日(土) 公開講演会、アラブ民族音楽レクチャー・コンサート
(明治大学駿河台キャンパス、リバティ・ホール)

12:30 受付開始

13:30 挨拶(主催者)

13:40~16:40 公開講演「<オリエンタリズム>再考」

講師 杉田英明氏(東京大学)

公開講演「サハラの日本人 沙漠研究と地域研究」

講師 小堀巖氏(国連大学)

アラブ民族音楽レクチャー・コンサート

演奏 ル・クラブ・バシュラフ

(松田嘉子氏、竹間ジュン氏、のみやたかこ氏)

16:45~17:45 日本中東学会総会

18:00~ 懇親会(リバティ・タワー23階)

5月9日(日) 研究発表

午前の部 10:00~12:10

午後の部 13:00~17:35 (休憩 15:10~15:25)

第1部会(リバティ・タワー8階、1083教室)

田村行生(中央大学・院) ムスリムのソグド征服と“改宗”

森山央朗(東京大学・院) 地方史の作者と作品：10~12世紀中東における
地方史人名録流行の概要

吉村武典(早稲田大学・院) 14世紀エジプトにおける水利行政の慣行と変
化

小笠原弘幸(東京大学・院) オスマン朝独立をめぐる言説：「オグズの慣習」
を中心に

飯田巳貴(一橋大学・院) ヴェネツィア絹産業とオスマン市場

秋葉淳(千葉大学) 末期オスマン帝国における「オスマン化」とシャリー
ア法廷

宮岡高尚(上智大学・共同研究員) アタテュルク時代とイニョニュ時代の
トルコ民族主義

岩坂将充(上智大学・院) トルコにおける政軍関係の再検討：軍の政治介
入(1960, 1971年)の要因分析から

末近浩太(日本学術振興会) シリア・ムスリム同胞団の思想と活動：サイ
ード・ハウワーの闘争の論理から

第2部会（リバティ・タワー8階、1084教室）

五十嵐大介（日本学術振興会） 後期マムルーク朝スルタンのワクフ：バルクークの事例

坂東和美（慶應義塾大学・院） チェルケス・マムルーク朝初期におけるスルタンの婚姻とその背景

平野豊（明治大学・非常勤） タフマースプ1世による母后と王妃の追放

高木早苗（早稲田大学・院） フレグ家による初期のイラン支配について

河原弥生（東京大学・院） 19世紀コーカンド・ハーン国におけるマルギランのトラたち

近藤信彰（東京外国語大学 AA 研） 初期ガージャール朝とテヘラン

吉村慎太郎（広島大学） イラン石油利権問題とレザー・シャー独裁：1933年新利権協定の評価と影響に寄せて

アレズ・ファクレジャハニ（東京工業大学・院） イランのアゼルバイジャンはどこへ：今日のアゼリ民族主義をとりまく環境への一視点

細谷幸子（東京大学・院） テヘラン・キャフリーザ介護福祉施設における入浴介助ボランティアの活動

第3部会（リバティ・タワー8階、1085教室）

斎藤剛（東京都立大学・非常勤） 聖者祭としてのズィクラー（追悼会）：モロッコにおける現代聖者ハッジ・ハビーブをめぐる事例から

新井一寛（京都大学・院） タリーカ（スーフィー教団）の組織形態とシャイフとの関係についての考察：現代エジプトにおけるティジャーニー教団の事例を中心として

澤井充生（東京都立大学・院） 死をめぐる回族のイスラーム改革：寧夏回族自治区銀川市の事例から

飯山陽（東京大学・院） イスラーム法理論における必須概念としてのマサラハ：ジュワイニーの理論より

小野仁美（東京大学・院） マーリク派法学書における未成年者の成長段階

兼川千春（立教大学・院） イエメンの「アフダーム」とは誰か：1990年以降の開発援助の場における言語分析を中心に

嶋尾孔仁子（元外務省・非常勤） イランの政治機構：イスラーム革命後の正当性原理を中心に

藤元優子（大阪外国語大学） ベストセラー小説『宿酔』の誕生

谷正人（大阪大学・院） イラン音楽にみる Charkh 演奏形式と楽曲構造から

第4部会（リバティ・タワー8階、1086教室）

アラビア語セッション 10:00～12:10 (発表および質疑はアラビア語)

司会 小杉泰 (京都大学)

アッザーム・タミーミ (京都大学)

CHO, Hee Sum (韓国、明知大学校 Myongji University, Seoul, Korea) Islamic Family Law, Possibilities of Reform from a Women's Rights Perspective—A Study on Egyptian Intellectuals' Perception of the Family Law—

岡本久美子 (大阪外国語大学) 『千一夜物語』における異界描写 (The Fantastic Worlds in the Thousand and One Nights)

福田義昭 (国立民族学博物館・非常勤研究員) 建築家の受難 スイニンマール伝説に関する若干の覚書 (An Unfortunate Architect: Some Notes on the Legend of Sinimmar)

鹿島正裕 (金沢大学) アラブ諸国と対立：戦後の諸局面に見る特徴と傾向
KATO Hiroshi (Hitotsubashi University), IWASAKI Erina (Graduate student, Hitotsubashi University), Ali EL-SHAZLY (Cairo University) Migration and Regional Categorization in Egypt

小副川琢 (英国国立セントアンドリュース大学・院) レバノン議会選挙とシリアの関与：1992, 1996, 2000年選挙の事例から

小島宏 (国立社会保障・人口問題研究所) 東南アジアにおけるイスラームと教育達成

三尾真琴 (金城学院大学・非常勤) レバノンにおけるコプトコミュニティと学校教育

Ali EL-SHAZLY (Cairo University), GOTO Yutaka (Hirosaki University) An Attempt of GIS Analysis on Urban Development in the Edge of Greater Cairo

第5部会 (リバティ・タワー8階、1087教室)

重親知左子 (大阪大学・院) 戦前日本におけるイスラーム受容に関する一考察

Ahmad Muftah Ruhuma NAILI (明治大学・院) Japan-Arab Relations: A Brief Literature and Interview Based on Survey of Modern Diplomatic History

Michel Penn (北九州市立大学) Yukio Okamoto and the New Japanese Foreign Policy

黒田安昌 (ハワイ大学) ネオ・コンの流れ：反ロシア主義から、反アラブ主義へ

吉田敦 (明治大学・院) EUの対地中海エネルギー政策：アルジェリアとのエネルギーブリッジ構築を例証として

水島多喜男 (徳島大学) グローバル化の中の湾岸産油国金融

菅瀬晶子 (総合研究大学院・院) 流動する帰属意識：イスラエル・ガリラ

ヤ地方におけるメルキト派カトリック信徒の自己規定、都市ハイファの事例
大河原知樹（東北大学） 近代における移民運動とユダヤ教徒：イギリス・
オスマン関係を中心として
吉田達矢（明治大学・院） オスマン帝国における「ギリシア正教徒」と「ギ
リシア人」：19世紀前半のテッサリア地方を中心に

【主催校から】

大会を終えて

大会実行委員長 永田 雄三（明治大学）

第20回年次大会は、5月8日（土）～9日（日）の両日、明治大学駿河台キャンパスにおいて開催された。初日は例年のとおり一般公開で、ふたつの講演とアラブ音楽の演奏という多彩な催しとなった。講演の最初は、昨年亡くなったエドワード・サイードによって提起された「オリエンタリズム」を杉田英明氏が、その概念の変遷、世界各国における翻訳、日本における事例を、画像を交えながら、一般の聴衆にもわかりやすく解説された。つづいて明治大学で8年間教鞭をとられた小堀巖氏の40年におよぶ国際的な沙漠研究活動を収録したビデオが紹介され、聴衆に感動を与えた。これに加えて、松田嘉子氏ほかのみなさんで構成されるル・クラブ・バシュラフによるレクチャー・コンサートは、素人にもわかりやすい解説とすばらしい演奏・音響効果で楽しいひとときとなった。2日目の研究発表は若い研究者を中心とした熱気にあふれる発表がつづいた。また、学会でははじめての試みとして、アラビア語によるセッションが設けられ、発表も質疑応答もアラビア語でおこなわれるという中東学会ならではの光景が見られた。

両日ともに、都心に位置するという地の利もあって、推定延べ300名の参加者を迎えて盛会であったと思う。初日も早くから聴衆が詰めかけたが、2日目は、各発表者の用意したレジメがいずれも大幅に不足した。このため大会本部では、学生諸君がレジメの追加コピーに、狂奔するという事態になったが、これは、いわば「うれしい悲鳴」といって良いであろう。その点で東洋史研究室の院生諸君の懸命な働きぶりが参加者に感銘を与えたようである。

大会を通じての最大の問題は、私立大学のため会場費が当初の予測をはるかに超えて高くなったことで、現在その値引きを交渉中である。また、リバティ・タワーは近代的な建築であるため、効率は良いが、余分なスペースが少ないため、参加者のみなさんに窮屈な思いをおかけしたのではないかと懸念している。

いずれにしても大会を大過なく終えることができほっとしているというのが正直なところであるが、事務局長の福田邦夫氏をはじめとする実行委員各氏、参加者のみなさんのご努力とご協力に改めて感謝致します。

【公開講座、アラブ民族音楽レクチャー・コンサート】

大会第1日目は、杉田英明会員による講演「オリエンタリズム 再考」、小堀巖会員のビデオ「インベルベルの日本人」上映、そしてル・クラブ・バシュ

ラフによるレクチャー・コンサート、という3本立てのプログラムだった。

杉田氏は、2003年に亡くなったエドワード・W・サイドへの追悼の意を込めて『オリエンタリズム』の監訳者に講演を依頼したこちらの意図をご理解くださり、国内・国外でサイドの問題提起がどのように受けとめられたか概観し、各国語訳の特徴を説明された。削除部分や訳注などのディテールから訳書の受けとめられ方を示唆する手法は、比較文化・比較文学研究者としての杉田氏らしい、と感嘆した。さらにスライドで日本人による絵画を見せながら、絵画のどこを指して「オリエンタリスティック」ということができるのか、その判断が難しいことをさりげなく示し、出版後25年を経て「自明」になりかかっている「オリエンタリズム」の概念を検証しようとした点は新鮮であった。

アルジェリアの制作会社によるビデオ「インベルベルの日本人」は、小堀氏の「沙漠研究」の足跡をたどるもので、フィールドワークとして訪れたインベルベルの人たち、共同研究者、家族、当人のインタビューなどで構成されていた。アジア・アフリカを横断して灌漑技術を現地調査し続けた小堀氏の情熱、現地の人や家族・弟子たちとの心温まるふれあい、など見る者を感動させる内容だった。さらに小堀氏は短い補足説明のなかで、亡くなった方々の名を挙げ、鋭い現状批判も展開し、ポジティブな長老としての姿勢を示された。

ル・クラブ・バシュラフは、アラブ諸国でも高い評価をうけているアラブ古典アンサンブルである。中東研究者として現地でなんとなく耳にしながらかも、その特徴を捉えたり再現したりすることが困難なアラブ音楽をよく知る機会となった。松田嘉子氏(ウード)、竹間ジュン氏(ナイ、レク)、のみやたかこ氏(ダルブッカ)の3名で、楽器、マカーム(旋法)、イーカー(リズム)についての解説をはさみ、代表的な数曲を演奏された。最後の曲は女子十二楽房のメロディーをとりこんだ楽曲だった。彼女らの演奏するナイやウードが喚起するイメージの豊かさに、私はいつも陶然となる。会場の多くの方にも、演奏を堪能していただけたようで、演奏後には大きな拍手が湧き上がった。

期せずして、テキスト 絵画、動画&音、音楽、と参加者の五感を次第に刺激してゆく構成となった。公開プログラムでもあるので、中東の「現況」を捉える視点を学会として提供できないかと考えたのだが、直にそれを示す企画にはできなかった。しかし40年の研究者としてのキャリア、テキストや資料の丁寧な「読み」は、どこまで信頼して良いかわからない「情報」の渦のなかにいる私たちに、参考となる指針と手法を垣間見させてくれた。アラブの人びとの心の中で鳴り続けているだろう「音」に触れた意義も決して小さくはない。

大会実行委員会側が機器の使用に習熟していなかったために、そして司会の不手際のために、予定よりも長時間になってしまった。そのために予定より1曲少ない演奏にくださったル・クラブ・バシュラフの方々と、効率よく総会を進めてくださった係の方々にお詫びと御礼を申し上げる。

なによりも、ご多忙な中を講演やコンサートを引き受けてくださった杉田氏、小堀氏、ル・クラブ・バシュラフの方々のご厚意には感謝に堪えない。また急

なお願いに応じ、ごく少額の謝金で音響設備の準備やミキシングを引き受けてくださった貫田顕勇氏の尽力なしには、コンサートは体をなさなかったといっても過言ではない。ここに記して謝意を伝えたい。

プログラムが無事に遂行されたのは、実行委員会ではない多くの人びとの協力によるところが大きい。雑務を引き受けてくれた大学院生、明治大学の事務、特に「構造的にはあるはずだって言うの、モニター・スピーカーなんとか探してっ！」という無茶な頼みも聞きいれ、貸与表にはないスピーカーを探し出して運んできてくれた(!)管財課には本当にお世話になった。

とても嬉しかったのは、参加者数が多く、講演やコンサートを楽しんでいる雰囲気と熱気が会場に感じられたことだ。関係者と来場者のみなさんに、感謝、感謝である。
(山岸 智子)

【研究発表会場から】

第1部会

田村行生氏は、ソグド地方におけるイスラームへの改宗を多方面から論じた。氏によれば、ソグド地方における改宗は、ウマイヤ朝による軍事征服の後、ムスリム優位という状況下において徐々に進展した。ムスリムによる征服とイスラームへの改宗を直接結びつける史料も存在するが、それはイスラーム化が進展した後代になって作り出された「伝承」であり、そこには、ムスリム勢力による征服をもって当該地域がイスラーム時代に入ったとする歴史観が反映されているとする。

森山央朗氏は、人名録を主とする地方史が10世紀から12世紀にかけてイスラーム世界で多数編まれたという現象に注目した。まず当該時期に編まれた地方史の特徴を時系列に沿って整理した後、編纂者の経歴と交流関係を分析した結果、編纂者はすべてハディース学者であり、知識の伝達を通して互いに交流を保っていたことを指摘した。そして、地方史の主たる編纂目的は、対象地域のハディースおよびその伝承者に関する情報を、他地域の学者と共有することであったと結論づけた。

吉村武典氏は、14世紀から15世紀初頭にかけてのエジプトにおける水利事業に関する文献史料の記述を子細に検討し、水利事業の慣行が守られなくなり変化していったのは、これまで指摘されていた14世紀末よりも半世紀早く、スルターン・ナスィル没後まもなくのことであったという可能性を指摘した。その理由としては、ナスィル期には既に水利事業がアミールなどにとって大きな負担となっていたことや、14世紀半ば以降の黒死病による人口減少などが考えられるとした。
(谷口 淳一)

小笠原弘幸氏の報告は、オスマン朝の建国にまつわる逸話である<オグズの集議>が、言説として、どのように語られてきたかを、15世紀半ばのオスマン朝期から20世紀のトルコ共和国建国期に至るまでの膨大な歴史書の記述から

丹念に検証した研究。前近代と近代とでは歴史書としての言説としての意味合いが変わるであろうから、さらなる傍証・検証が不可欠であるものの、建国期から現在のナショナリズムの動きにも関わる極めて独創的で興味深い研究であった。

飯田巳貴氏の報告は、16世紀後半から17世紀初めのオスマン帝国とヴェネツィアの絹産業の関わりを、主にイタリア語史料から分析した研究。地中海史については「近代世界システム論」のように理論ばかりが先行してきたことを批判して、実証的に中世以来の伝統的な両国の経済関係が、近世になって消滅せず別形態に移行しながら存続したことを指摘する。イタリア語史料を主として用いているが、望むらくはオスマン語史料とのさらなる比較検討を望みたい。

秋葉淳氏の報告は、19世紀というオスマン帝国末期の時代にあって、リビア・トランスヨルダン、ハウラーン・イエメンといった「辺境」地域において、新しい司法組織として長老府から任命されるナーイブを通して、「オスマン化」という現象の有無を議論する。シャリーア法廷の有り様から末期オスマン帝国の実像を検証する試みとして大変興味深いものであるが、斬新であるが故に背景の説明に時間を要して肝心の本論発表が駆け足だったのが残念である。

(三沢 伸生)

第1部会午後後半の3報告はいずれも現代政治に直結する問題が精緻な実証によって語られた興味深いものであった。

宮岡高尚氏の報告は、アタテュルク時代からイノニユ時代へ、トルコ民族主義がいかなる変化を遂げたのかを、国内の政治的対立のみならずソ連などとの国際関係をも視野に入れて多角的に考察したものだ。とくに、1944年の「人種主義・トゥラン主義」裁判を最大の分岐点と位置付け、この裁判を数多くの弁護書をしてがかりに再現し、イノニユ政治の本質にせまった。

岩坂将充氏の報告は、トルコ現代政治史の最も重要なテーマのひとつである政軍関係をとりあげたものである。時代的に前報告との連続性も見られ、一層興味深く聞くことができた。過去4度のクーデタのうち、60年、71年の事例をとりあげ、各時期の軍政関係が語られた。氏は、クーデタの背景として、将校団の経済的「利益」との関わりを指摘し、「ケマリズムの擁護者」としての役割を果たしたとするこれまでの解釈に新たな側面を付け加えた。

末近浩太氏の報告で舞台はシリアへと移った。氏は1960年代後半から80年代前半のシリア・ムスリム同胞団と中心的イデオログ、サイード・ハウワーの思想を紹介し、その理論が実際の運動の中でどのような形をとってあらわれたのかを明らかにした。イスラーム復興運動がシリアのみならず、イスラーム世界各地で高まりつつある中で、思想と活動の実態とを分析するこうした研究は今後ますます求められることになる。

(小松 香織)

第2部会

五十嵐大介氏は、後期マムルーク朝の歴代スルタンが様々な手段による私財の獲得やワクフ化を通じて、独自の経済基盤確保に努め、そのための官庁や官職も存在したことに注目し、最初の専門官庁を設置した初代スルタン・バルクークの私財のあり方と私財形成に関して、エジプト国立文書館及びワクフ省所蔵の文書資料に基づき詳細な検討と分析を行った研究成果を報告された。分析は私財入手やワクフ設定の時期、入手経路(方法)、代理人等に及び、さらにスルタン没後の管理・運営や受益者に関する稀少な情報の報告がなされ、スルトンの権力のあり方や国家体制を検討する上での新たな展望を提示された。

坂東和美氏の発表は、同じくバルクークと彼の後継者であったファラジュの婚姻関係に注目して史料分析を行ったものであった。同発表では、それぞれのスルトンの姻戚関係(妻の父や娘・姉妹の配偶者)の傾向及びその変化に関する検討がなされ、それが如何なる目的や政治的背景を有していたのかに関して考察が示された。多くの史料を得ることがなかなか難しいと思われるスルトンの家族構成に焦点を当て、親族や婚姻関係の広がりがチェルケス・マムルーク朝のスルトンの権力基盤を考える上で重要な意味を持っていたことを提示した意欲的な試みであり、今後さらに史料を集めて精密な検討を進められることを期待したい。

平野豊氏は、サファヴィー朝宮廷における母后及び王妃の権力と政治への関わりについて、詳細に史料を検討した成果を発表された。母后権を研究する事例として、タスマースプ1世の母后タージルーを取り上げ、彼女の政治権力の拡大からその喪失に至るまでの経緯を、部族間抗争や部族の内部分裂、オスマン朝のイラク遠征等の複雑な政治・外交情勢と関連づけられながら詳細に再現・分析した発表であった。筆者は専門外なので、氏の発表を論評する資格はないが、坂東氏の発表とも関連して、詳細の情報収集という点ではかなり困難といえる権力者の女性家族に関する分野にも積極的な取り組みがなされたことに感銘を受けた。

第2部会の発表に共通して、史料に対する労を問わない真摯な取り組みが何われ、それぞれに今後の研究の進展が期待される。(太田 敬子)

モンゴル帝国史研究は、日本が世界に誇れる研究分野のひとつであろう。高木小苗氏の発表は、フレグのイラン遠征に従軍した辺境防備軍(タマ軍)と西征軍の帰属問題の分析を通して、『集史』にみえる「モンケの決定」なるものを、イルハン朝のイラン支配を正当化する目的で脚色されたものであることを実証しようと試みた。帝国史研究の基本史料とされる『集史』の読み直しを迫る意欲的な発表に思えた。

河原弥生氏は、コーカンド・ハーン国において活躍したトラと呼ばれるナクシュバンディー系聖者の系譜と事績を検証した。注目に値するのは、これらほとんど知られることのなかったトラたちの活動を、現地で入手した私的に伝来

する聖者伝や土地文書、マザールの調査や子孫たちからの聞き取りによって跡づけたことであろう。口頭伝承と記述史料を相補的に織り合わせる発表者の手法は斬新で、興味深いものであった。

イランのカージャール朝国家を遊牧部族的であるとする言説、あるいは「操縦の専制」と描くモデルが有力である。近藤信彰氏は、こうした国家イメージに修正を迫る試論として、初代と第2代シャー時代のテヘランを事例に、ノウルズの時期には僅かの例外を除いて君主が首都テヘラン滞在に執着したこと、また文書史料に基づいて君主が多くの場合市内の不動産物件を、証書を発行して購入したことなどを明らかにした。

旧来の定番史料の読み直し、口頭伝承の収集と活用、新たな文書史料の発掘と、多彩な研究アプローチが印象に残ったセッションであった。（黒田 卓）

第2部会最後のセッションでは、それぞれ独自の視点から現代イランの政治や社会の有り様を探ろうとする興味深い報告が続き、日本におけるイラン現代史研究の広がりを感じさせるセッションとなった。

吉村慎太郎氏は、レザー・シャー政権が、かつて1901年にカージャール朝とイギリスとの間で結ばれていたダーシー石油利権契約を32年に一方的に破棄しながら、翌年新たに妥協の内容を含んだ利権契約をAPOC（アングロ・ペルシア石油会社）と結ばざるを得なかった事情を、イラン国内の動向や対英関係と絡ませながら明らかにし、この利権契約調印がレザー・シャー政権の「民族主義的正統性」の限界を露呈させ、独裁への傾斜に拍車をかけたことを指摘する。レザー・シャー期をどのように評価するかは、イラン現代史研究にとって重要な課題であり、そのための一つの有効な手がかりを示した報告であった。

ついで、アーレズー・ファフレジャハーニー氏は、『南アゼルバイジャン』は『北アゼルバイジャン』との民族統一を求めているか」という問いかけをしたうえで、この問題にかかわる近年の動きを紹介する。両者の間には過去およそ1世紀にわたる人的・思想的交流が観察される一方、現在のイランのアゼルバイジャン人たちが「北」との統合には消極的であるとの指摘には頷ける。民族的な出自の共通性がかならずしも両者の間に強い統合への意志を涵養するわけではないことは、国境によって「分断」されたとされる他の民族集団にも見られるものであり、国家という枠組みと民族集団との関わりを考えるうえで示唆に富んだ報告であった。

最後の細谷幸子氏は、「イスラームの理念に基づいた慈善活動やボランティア活動が、イランの社会福祉制度のなかでどのような位置づけにあるのか」という問を立て、事例としてテヘランにある高齢者や障害者を対象とする介護施設でのボランティア活動を取り上げる。ボランティアによる入所者への援助が、入所者の神への感謝となり、そのことが援助をしたボランティアへの神からの「報酬」を引き出すという、神、ボランティア、入所者の3者の関係性が施設の活動を支える基本的な理念となっているという指摘は、現代イランにおける

福祉のあり方や信仰生活を考えるうえで非常に興味深い。 (山口 昭彦)

第3部会

昨年に続き、司会を担当した。今年は第3部会午前の部、人類学に関連の深い3発表であった。まず、斉藤剛氏の発表は、これまで見られたムーセム(聖者?祭)研究ではなく、ズィクラーに着目したものである。知識人の参入の仕方も問われていた。文献資料から得られる情報を咀嚼した上で、自身のフィールドワークの成果を重ね合わせており、本格的な歴史人類学の誕生を予見させるものであった。

続いて、新井一寛氏の発表は、新たにティジャーニーヤ・タリーカヘフィールドワークの対象を拡げ、さらに氏によるこれ迄の他タリーカ研究の成果と比較検討する試みであった。その狙いはタリーカの組織形態探究、シャイフと組織との関係の問い直し、タリーカの内在的理解にあるとする。

一方、澤井充生氏の発表は、貴重な民族誌データを提出すると共に、中国の社会体制において、死に関連する儀礼の在り方を事例として取り上げ、回族の異なる立場からのせめぎ合いが丁寧に描出されていた。図像資料も有効であった。

最後に一言。前近代の歴史系の発表を各部会で時代順に並行してつらねる今大会の方式に再考の余地はないであろうか。筆者のように、前近代のアラブ地域中心の社会史研究にも関心を持つ者は、午前中に3部会(アラビア語のセッションを含め4部会)を同時にかけ持つことになる。しかも、会場の構造上、頻繁な出入りは困難であった。他の参加者からも類似の訴えを聞いた。それにしても、司会ゆえ、アラビア語セッションを聞けず残念。 (大稔 哲也)

飯山報告は、イスラーム法理論においてマスラハがなぜ不可欠な概念として現れたかを、ジュワイニー(1085没)の著作『ブルハーン』をテキストに検討した。ジュワイニーは、有限な法源が有限と無限の現実という乖離を埋める手段として、憶測によって立法者の意図とマスラハに関係づけることによって蓋然性を高めうると考え、飯山氏はここでいうマスラハとは「善の原因、手段」と定義した。質疑では、ムータジラ派では善を啓示的利益として説明しているが、マスラハは現実世界で実行可能なものとしてでてきたのか、また19世紀には善を利益として置き換える考えがとられるがそれとの異同などについて議論がなされた。

小野報告は、9世紀から19世紀までのマーリク派法学書を検討し、未成年者に関する規定のなかで、13世紀以降に「弁別能力を備えた未成年者」について巡礼や商取引などについて法的能力を認めるという変化が認められることを示した。その原因としては、実務上の理由や学説の発展のほか、他法学派の影響を指摘した。質疑では、法学派間の理論の交流がどのように行われたのか、未成年者の男女での扱いの差の有無などについて質問がだされた。

兼川報告は、1990年代以降のイエメンのアフダームと呼ばれるエスニック・マイノリティー集団についての言説を分析し、それが支配層のみならず被支配層まで、自己の地位を正当化するための手段として利用されつづけていることを示した。質疑では、アフダームの反対概念である部族などの社会分析や、部族という概念自体の言説分析が必要であるという意見が出された。

前二者の報告はイスラーム法学書の分析で、報告者自身が専門的すぎて関心を引かないのではないかと危惧を述べたが、聴衆は35名をこえていた。逆に兼川報告に移ったときに退場者が増えたのは意外であった。また発表者3名はいずれも女性の大学院生であったが、本学会の会員男女比は、全体ではほぼ2:1であるが、学生会員比は1:1に近づいており、このような趨勢を示すものとして印象深かった。
(三浦 徹)

嶋尾孔仁子氏による発表は、政治機構論で論じられる「正当性」が、イランの政治機構においてどのような形をとっているかを分析し、さらに「自発的結社」としてイランの政治シーンに登場する諸集団を性格づけようと試みたものである。

藤元優子氏による発表は、1995年にイランで刊行されて以来驚異的な発売数(20万部)を誇る小説を、「大衆文学」と位置づけ、その文体の特徴と、小説を受容する社会状況の両面から、人気を博した理由を明らかにしようとしたものである。

谷正人氏による発表は、イラン音楽の旋法を分析し、そこに見出される構造を、イラン建築などにも共通する「チャルフ(輪)」として理解しようとしたものである。

3人の発表は全く異なる題材と方法論により、それぞれイランの社会=文化にアプローチする野心的なものであった。発表で提示された新しい論点は興味深く新鮮であったが、地域研究における概念化の難しさも痛感させられた。

(山岸 智子)

第4部会

第4部会の午前中のセッションは、アラビア語を共通言語としておこなわれた。これは、本学会でも最初の試みで、国際化への対応の一つとして企画された。一つのきっかけは、かつて韓国中東学会(KAMES)大会のために訪韓した際に、KAMESメンバーから、彼らが日本の大会で報告する場合、日本語はもとより英語も必ずしも得意ではないので、専門領域の中東の言語(アラビア語なり、トルコ語、ペルシア語)の方が報告しやすいと聞いたことであった。実際、今回も報告者の一人に、KAMESからCHO Hee Sun氏を迎えた。

CHO氏の報告は、韓国の大型研究プロジェクトの一環としてエジプト現地で行われた聞き取り調査の結果を発表するものであった。具体的な聞き取り調査の細かな報告とそれをめぐる中間的分析から成る報告は、非常に興味深いもので、活発な質疑がなされた。韓国でも最近、中東やイスラームに関する

大型の研究プロジェクト助成がなされていることは、嬉しいニュースと言える。

次に、岡本久美子氏が千一夜物語に登場するジンや魔物に関して報告をおこなった。質疑では、日本における魔物との比較論もおこなわれたが、それがアラビア語でなされたため、これまでにないような文化交流の雰囲気も醸し出された。

最後の報告は、福田義昭氏で、伝説の起源論や伝説が持つ社会機能などをめぐる議論も含めて、楽しく活発な質疑がなされた。

総じて、アラビア語セッションという新企画は、会員の皆様から好評をもって迎えられたようである。参加者数も予想以上で、企画サイドの心配は杞憂に終わった。セッション全体を組織する上で尽力いただいた岡本氏、共同司会を務めていただいたアッザーム・タミーミー氏（京大客員教授）にも、厚く御礼申し上げたい。
(小杉 泰)

第4部会第2セッションは、現代アラブ地域の政治・社会がテーマであった。最初の鹿島正裕氏の報告は、第2次世界大戦から今日までのアラブ諸国間の関係について、とくに対立に焦点をあててその特徴を概観した。氏はこの期間を6つの局面に分け、域内の主導権争い、アラブの統一と国家主権の尊重、王政と共和政、イスラエル、欧米、ソ連、イランなどとの対外関係などに着目して検討した。

次の加藤博氏、岩崎えり奈氏らの報告は、エジプトにおける労働移動をテーマとするもので、初めに農村からカイロへの労働移動について、大カイロの貧困地区における農村移住者の世帯調査の結果をGIS（地理情報システム）を使って説明した。さらに、地方の就労構造に関するデータも用いて、1980年以降における地方都市での雇用創出と、それによる農村から地方都市への労働移動の実態を明らかにした。エジプト中央統計庁の協力を得た世帯調査のマイクロデータ、各種の出版統計のマクロデータ、およびGISの技術を用いた一連の研究における最新の成果報告であった。

3つめの報告は小副川琢氏によるもので、内戦後のレバノンにおけるシリアの関与を過去3回の議会選挙を通して分析した。選挙法の改正や立候補者名簿の作成によるシリアの関与や、マロン派の危機意識による選挙参加によって、シリアの影響が維持された一方、自己利益に基づいてレバノン人立候補者がシリアと「協力」した側面も指摘された。質疑応答では、3つの選挙へのシリアの関与の違いや、シリアの関与を明らかにする研究資料などについての質問がなされた。

日本の中東研究では、歴史や思想面からのアプローチが圧倒的に多い中で、近年には政治学や社会学の本格的な研究が着実に進んでいるが、同セッションの報告はそれを示す好例と言えよう。
(池田 美佐子)

第4部会第3セッションでは、小島宏氏、三尾真琴氏、Ali EL-SHAZLY 氏に

よる発表が行われた。当初 EL-SHAZLY 氏の共同発表者として予定されていた GOTO Yutaka 氏は都合により欠席されたが、各報告にはそれぞれ 17 名、28 名、19 名の聴衆が集まった。

小島氏は 1990 年代前半に実施された「女性の地位と出生力に関する調査」に基づき、マレーシア、フィリピン、タイの 3 カ国を対象に、男女の相対的地位の主要な指標の 1 つである教育達成に対するイスラームの影響を分析した。その結果、マレーシアではイスラームが有配偶女性の教育達成を促進している反面、フィリピンでは大きな抑制効果が見られること、タイでは統計的に有意な効果を持っていないことが明らかにされた。

次に三尾氏は、レバノンでの現地調査をもとに、1996 年に同国 18 番目の宗派として公認されたコプト教会の現状を、特にアルメニア教会と比較しながら報告した。レバノンにおけるコプト教徒人口は 5000 人程度で、各地に散在している。彼らは主として 1926 年と 1951 年にエジプトから流入したが、大半は単純労働者で生活水準も低い。またコミュニティ活動も脆弱なため、レバノン特有の統治システムである「宗派主義」の恩恵に与る状況にはないと結論づけられた。

一方、EL-SHAZLY 氏は、農地を都市化する形で拡大を続ける大カイロの北端に位置するカリュービーヤ県ショブラー・アルヘイマ郊外にあるピガム地区の空間的な発展と都市化過程について、GIS を駆使した分析画像と現地の写真を用いつつ発表した。そこでは、郊外の都市化をめぐる行政当局と地主の攻めぎあいが生々しく描き出され、結果として無計画に近い都市化が進行している状況が確認された。なお、各発表の後には聴衆との間でそれぞれ活発な質疑応答が行われている。(飯塚 正人)

第 5 部会

最初の発表者、重親知佐子氏は、戦前日本における邦人初のメッカ巡礼者である山岡光太郎の 1900 年代初期からの活動と、1930 年代後半の大日本回教協会の活動を相互参照しながら、戦前期の個人としての山岡および組織としての協会のイスラーム受容や認識の実態を丹念に検証し発表した。先行研究では前者を「敬虔なムスリム」、後者を「国策にそう工作機関」という評価が強調されてきたが、未刊行原稿や協会の所内資料(整理中)の分析次第では、個人や組織のイスラーム受容ならびに戦前日本のイスラーム研究の再評価に至る貴重な研究となろう。

2 番目、3 番目の発表は英語で行われた。まず Ahmed Muftah Ruhuma NAILI 氏の発表では、日本 - アラブ外交関係史のクロノジカルな提示がアラブ連盟各国ごとに紹介され、両者の交流の全般的な様相が限られた時間の中で要領よく報告された。日本 - アラブ双方の互いに対する外交政策理念の欠如が大きな問題であるとの指摘があり、現在の外交政策レベルにおける文明間対話や交流の強化をはじめ、民間や学術交流の活性化などの提言がなされたが、発表の焦点

が絞りきれない憾みがあった。研究方法としてのインタビュー調査の活用も今後の課題と思われた。

2 番目の Michael Penn 氏は、日本の外交政策を「岡本行夫」という個人に焦点を絞って分析し発表した。氏は、岡本が誤ったイスラーム認識を抱いているのではないかと摘記したうえで、イラク戦争には反対の立場をとりながらも日本の対イスラーム世界とりわけ対イラク政策の決定に重要な役割を果たしたと論じた。最近のイラクにおける日本人質事件の経過などにも言及しつつ、これまでの良好な対日感情や対立の歴史がないことを前提として、日本が国連に軸足を置きつつ外交政策を自らが決定する重要性を指摘した。

発表会場には各々30 人前後の参加者がおり質疑や議論が活発に交わされ時間が足りないほどであった。その経過を振り返ると、日本とイスラーム（主にアラブ）世界との「交流」に関する3本の研究発表を通じて問われていたことのひとつは、日本の対イスラーム世界の外交政策の形成そのもののプロセスに加えてこれに寄与しうる学術研究からのアプローチのあり方にもあるように思われた。

（店田 廣文）

黒田安昌氏の報告では、米国によるイラク戦争遂行の背景や要因としての、ネオコンの歴史と思想内容が紹介された。社会主義者の反共主義者への転向やイスラエルとの関係などが指摘され、それらをラスウェルの「公益の主張による私益のための政治的手段の正当化」という理論を用いて分析し、ネオコンの目的が彼らのための財政確保や権力へのアクセスおよび米国世論の形成であることが論じられた。

吉田淳氏の報告では、アルジェリアから EU へのエネルギー輸出から、アルジェリアの石油・天然ガスへの依存や、その収入が国内経済や雇用に結び付かない構造的な弊害などが述べられた。ただ、状況に関わる種々の解説に終始し、それらが整理されて、具体的な評価や問題の指摘に結び付かなかったことが残念であった。

水島多喜男氏の報告では、バハレーンを除く GCC 諸国とイエメンの経済状況が紹介された。これら諸国は、米ドルを為替安定対象通貨として事実上のペッグ制をとっており、通貨投機さらには通貨危機を招きやすい。しかし、90年代後半からの経済ブームは、通貨危機につながらなかった。その理由として、資本市場の対外的閉鎖性（グローバル化が進んでいない）や政府による介入が指摘された。

（松本 弘）

第5部会の午後の後半は、中東での非ムスリム少数者集団に関する興味深い報告が3つ行われた。1番目の菅瀬晶子氏の報告は、ハイファ市にある2つの教会（メルキト派とローマ・カトリック）への参拝行為の分析から、メルキト派の人々のアイデンティティ構造を分析したものである。菅瀬氏は3名のインフォーマントからえた情報を元に、参拝に影響を与えるのは地縁・血縁であり、

その行為はイスラエルのアラブ市民に共通する複合的アイデンティティの選択的使い分けの一例であると結論した。質疑では、少数者にあつては選択権の外在的制約が問題であるのに、研究者があらかじめ「メルキト派」という分析枠を前提に議論を展開するのは矛盾ではないかとの指摘があつた。

2番目は、大河原知樹氏の報告は、1850年代から99年までに起こつた4例のシリアに拠点をおくユダヤ教徒一族ハラリー家の英国国籍申請を題材に、前近代的な庇護民慣習とオスマン国籍法以後の近代的国籍概念のせめぎ合いを考察するため、シリア、トルコ、イギリスの史料を詳細に検討した。大河原氏は、結論としてオスマン側の一方的従属として描かれる従来のカピチュレーション論の見直しに言及したが、報告の内容はこの時代の国民国家システムの確立に平行してイギリス自らが国籍概念を厳密に履行せざるをえなくなり、旧来の対外進出の方便であつた庇護民制度を放棄せざるをえなくなった過程としても理解できるように思われた。

3番目の吉田達矢氏は、1830年代から40年代のテッサリアに関連するオスマン文書史料の分析から、この地方の匪賊の行動の多様性、ギリシア王国からの帰還民問題、地方主義などに関する新事実を発見した。氏の指摘した事実は、研究蓄積が比較的薄いこの時代のテッサリアの歴史を解明する上で大きな収穫であつたと言えるが、それらを元にギリシア王国内の政治構造にまで言及したのは些か勇み足であつたと思われる。今後は、ギリシアやアルバニアの研究成果と史料研究の成果を突き合わせる中で、発見された事実の意味を再検討することが課題となるであろう。

(佐原 徹哉)

* 例年、年次大会報告の中で大会会計報告も掲載していますが、今回は会場費についての交渉がまだ継続中であるため、次号でご報告させていただきます。

(学会事務局)

日本中東学会国際ワークショップ報告 Changing Knowledge and Authority in Islam (イスラームの変容する知と権威)

2004年3月25～26日の2日間にわたって、国際ワークショップ Changing Knowledge and Authority in Islam が、東京大学山上会館において開催された。満開の桜に囲まれた会場には、2日間で約100名の参加があり、海外から8名の研究者を招聘し、3つのセッション、12本の研究報告と討論からなるワークショップを実施した。

このワークショップは、佐藤次高会員(早稲田大学教授)の提案をうけ、三浦徹、酒井啓子(学会国際交流担当理事)および栗田禎子(年報副編集長)が第一次案を作成し、12月に学会理事会での承認をへて、さらに東長靖、松永泰行会員がセッション責任者として加わり実行委員会を組織した。開催にあつては、国際交流基金中東交流事業からの助成をうけるとともに、財団法人東洋

文庫現代イスラーム研究班の協賛をえて実施した。また M. Kadivar 師の研究発表と参加にあたっては、ファフレジャハーニー会員の協力をいただいた。

本ワークショップの特徴は、中世から現代まで通時代的に、中東から東アジアまで広域的に、「知と権威」のあり方を討議するところにある。対象となる「知と権威」は、スンナ派に偏ることなく、シーア派やスーフィズムのもつネットワーク、あるいはリベラリズムや社会主義などの「西洋思想」との交流を含めて、多元的なイスラーム世界の知をあつかう。発表者も、エジプト、イラン、インドネシアの現地で活動するイスラーム知識人から、欧米の研究機関に所属する研究者、そして日本の研究者と多彩な顔ぶれである。このような領域横断的なワークショップは、特定の研究分野や地域へのしがらみをもつ国や機関では開催しにくく、研究の多元性や柔軟性を重んじてきた日本の中東研究の特徴に立脚した事業といえる。また、欧米や中東では未知ともいえる中国の漢族ムスリム知識人（回儒）の思想についての研究発表を加えたのは、海外からの招聘者にとって、日本でのワークショップが新たな知的出会いの場となることを期待してのことであった。

本学会がこのような規模の国際ワークショップを主催するのは初めてのことで、実行委員会が企画運営の柱となり、広報や会計などの事務は学会国際交流委員会が担当した。年度末の開催であったため、100名の大会議室の席が埋まるかどうか心配するむきもあったが、学会員のみならず、ポスター、チラシ、ホームページなどでの幅広く広報を行ったところ、事前の参加申し込みだけで90名に達し、当日はさらにホームページなどで開催を知ったムスリムの留学生など15名の参加者があり、新聞などのジャーナリストの取材も行われた。

参加者には、英文発表原稿を印刷して配布し、質疑や討論が相互理解のもとに活発に行われるように配慮した。初日夜の懇親会には50名以上が参加し、片倉もとこ会員の音頭によって乾杯が交わされ、賑やかな集いとなった。エジプトの Mady 博士がルフトハンザ便の欠航により来日できなくなったことが残念であった。

プログラムと3つのセッションにおける発表・質疑・討論については、下記のセッションの議長による報告をごらんいただきたい。また、本ワークショップの英文報告は、年報 AJAMES の特集号などの形で刊行することを検討している。

確固たる組織や財源をもたない学会が、このような国際ワークショップを開催することにはさまざまな困難が伴ったが、実行委員や発表者はもとより他の参加者、助成や協賛をいただいた国際交流基金や東洋文庫のスタッフは、運営に気持ちよく協力してくださり、おかげで成功裡に終えることができたことをご報告申し上げます。
(国際交流担当 三浦 徹)

【国際ワークショップを終えて】

佐藤 次高

日本中東学会、国際交流基金、財団法人東洋文庫の協力をえて、国際ワーク

ショップ Changing Knowledge and Authority in Islam を盛会のうちに終了することができた。実行委員のメンバー、それに2日間にわたって会の運営を手伝ってくださった学生の皆さんに心からお礼申し上げます。幸い開催の時期が桜の季節と重なっていたので、外国からの参加者のなかには、桜を満喫して帰られた人も多かったのではないだろうか。

今回のワークショップの開催は、ニューヨークに本部を置く Social Science Research Council (SSRC) 内の1部会 Regional Advisory Panel on the Middle East Studies (RAP) の活動とも密接に関連していた。2001年10月に RAP の第1回会合がニューヨークで開かれ(9.11以前からすでに準備が開始されていた)私もこれに参加することを求められた。メンバーは、アメリカ、クウェイト、レバノン、エジプト、トルコ、ベルギー、マレーシア、日本などからおよそ10名であった。それ以後、アンマン(2002年1月)とカイロ(2003年3月)でも会議が開かれ、これからの中東研究において、重要かつ魅力的なテーマは何かということが、かなり長時間にわたって検討された。その結果として浮かび上がってきたテーマのひとつが、「イスラームの変容する知と権威」であった。このテーマによる国際会議を日本中東学会に提案したところ、まもなく学会の主催による国際ワークショップの開催が決定され、東洋文庫でも2003年度から「現代イスラーム研究」プロジェクトが開始されていたので、同文庫協賛の形で会議が実現したのである。

開催時期が年度末に当たっており、どのくらいの人数の参加者があるか、つかみきれないのが実状であった。しかし会を開いてみると、初日の参加者は80名を越える盛会となり、和やかな雰囲気のうちにも、熱心な報告と討論がおこなわれた。新プロ「イスラーム地域研究」の国際会議でも感じたことであるが、今回も特に若い世代の人たちが積極的に発言していたことが特徴であると思う。15年、20年前の国際会議では、討論の場で発言するのは外国からの参加者ばかりであった。学术交流の場でナショナリスティックな姿勢をとる必要はまったくくないが、若手研究者の登場が日本の中東・イスラーム研究を押し上げる力強い潮流であることは確かであろう。

「イスラームの変容する知と権威」は、現代のイスラーム世界を理解するには不可欠のテーマであるが、大きな課題であるがゆえに、対象となる地域も多岐にわたっている。したがって2日間の報告と討論では、十分な議論を尽くすことができなかつたことはもちろんである。できることなら、近い将来、カイロ、イスタンブル、テヘラン、ジャカルタなど、どこかの都市で同様のテーマの会議が開催され、さらに議論を深めることができればと思う。

(2004年4月24日)

【第1セッション】

第1セッションは、近代スーフィズムの思想と組織を論ずるべく、「イスラーム復興の時代におけるスーフィズムとタリーカの運動」と題された。

本セッションは、ウラマーを取り上げる第2セッション、近代知識人に注目する第3セッションと組み合わせられ、全体として本会議の主題をカバーするが、同時にセッションを組織した東長靖(京都大学大学院)と司会を務めた赤堀(上智大学)が、1997年以来展開してきた聖者信仰・スーフィズム・タリーカをめぐる共同研究の成果としても構想された。この共同研究は、すでに4回にわたり国際ワークショップやシンポジウムでのセッションを組織しており、そのなかには、本学会の派遣により、平成14年ドイツで開催された第1回世界中東研究大会(WOCMES: World Congress for Middle Eastern Studies)で組織したセッションも含まれている。

全体としてはスーフィズムの近代に注目するセッションではあるが、最初に行われた東長の発表「スーフィズムの過去と現在 - スーフィズムの3極構造論をもとに」は、むしろ超時代的にスーフィズムの総合的理解への展望を示して、続く3本の論文を有効につなげようとするものであった。

スーフィズムの3極構造は、この数年にわたって東長が検討し、次第に改良を加えている理論的枠組みである。それは、神秘主義・倫理・民衆信仰をそれぞれ第1、第2、第3の極とし、それらにまたがる総体としてスーフィズムをとらえ、その上で、3極のいずれが強調されるかにより異なるスーフィズムの形があり、また、いずれを重視するかによって異なるスーフィズムの理解がなされてきたことを巧みに説明する。本発表ではとくに、倫理から出発して神秘主義を生み出し、やがて3極すべてにわたるスーフィズムが構成された前近代から、倫理に偏重した近代スーフィズムへと、歴史的展開を3極構造によって説明する点に新しい展開が見られた。技術的な問題として、スムーズに歴史展開を説明する上で、倫理を第1極、神秘主義を第2極とした方がよいのかとの提案が赤堀(上智大学)からあった。

最後に東長は、近現代イスラームのあり方の問題として、イスラーム主義に対抗する別個の可能性としてのスーフィズムへの注目を提唱した。後述するように、とくにこの点をめぐって本セッションでは活発な議論が交わされることとなった。

続いて、より具体的な事例に基づく研究発表3本がなされた。東長の発表を含めると、セッションの全体は思想研究者と歴史学者各2名による構成である(ディスカッサントを加えると各3名)。

2番目に発表を行ったのは、Mark Sedgwick(カイロ・アメリカ大学)である。「アラブ世界におけるタリーカ・改革・タリーカ改革」という発表題目が示すように Sedgwick はまず、18世紀のタリーカが社会組織としては繁栄していたことをふまえ、19世紀以降における近代改革がいかにタリーカの衰退を招いたかを論じ、ついでこれに対応したタリーカ側の改革運動を取り上げた。タリーカ改革については、とくにモロッコのブドゥシーシー教団およびエジプトなどに広がるダングラーウィー教団を現代において活力を獲得したタリーカとして紹介された。これら2教団についての情報はたいへんに参考になったが、ブド

ウシーシー教団が新たに都市部中産層に信奉者を獲得した点の強調は、19世紀のハーミディー・シャズィリー教団についてすでに Gilsenan が指摘したことであって、あまり新味のある知見ではなかった。なお、発表中に紹介された「ネオ・サラフィー主義」の概念は、今後の検討に値する概念であると思われる。

次の発表者である Mahmut Erol Kılıc (マルマラ大学、イスタンブル) は、「現代トルコにおけるスーフイズム」と題した発表を行った。これは、トルコ共和国成立後のテッケ(修道場)禁止法に対して、スーフイーがどのように対応したかの問題を中心に、丹念に準備がなされた発表だった。Kılıc が注意を促したのは、スーフイーの対応が一律ではなかった点であり、国外に脱出した者、公職から退いて沈黙の抵抗を続けた者、公職にあってなお密かに活動を続けた者、禁止を受け入れてこれに積極的に荷担した者などが具体的に紹介された。時間の制限もあって、一部説明を省かなくてはならなかったのが残念である。また、会場の中田考(同志社大学)から質問があったように、今日のトルコにおけるスーフイズムの状況についてあまり言及がなかったことについては、確かに発表題目にそぐわないことではあるが、同時にトルコ人研究者がトルコのスーフイズムを扱うという文脈について、少なからず示唆があったといえるだろう。

最後に、小松久男(東京大学大学院)が、アンディジャン蜂起を事例に発表を行った。「近代中央アジアにおけるイスラーム復興とタリーカ」と題するこの発表で、小松はナクシュバンディー教団の導師ドゥクチ・イシャーンが、いかなる教えにしたがってイスラーム復興を目指し、いかにしてウズベクやクルグズの間信奉者を組織してロシア支配に対抗したのかを論じた。とくに、ロシア帝国側の蜂起の解釈や、同時代や後代のムスリムの解釈の紹介は興味深く、アンディジャン蜂起を、タリーカを介した民族主義的運動とするような理解がいかに不十分であるかがはっきりと示され、タリーカが反植民地闘争や民族独立運動に関わったとされる類例についても再考を促す契機が提供された。ただし、小松が紹介したドゥクチ・イシャーンの信条や信仰実践はスーフイズムというより、イスラーム一般についてのものであって、ナクシュバンディーの教えに直接関わる点について、他の発表との関連からももっと聞きたかったというのが実感であった。

その後、飯塚正人(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)が思想研究の立場から、また私市正年(上智大学)が歴史学の立場からコメントを寄せた。続いて、個別の発表に対する多くの質問も寄せられたが、何といても議論的となったのは、イスラーム主義とスーフイズムが、近現代イスラームのあり方として対照することができるという考え方であった。すでに東長の発表で予告され、私市が、社会の改革から個人の変革へと向かうイスラーム主義に対して、個人から社会へ向かう運動として近現代スーフイズムを対照させる枠組みを提示したように、この話題は聴衆に様々な発想の展開を生み出した

とみえた。イスラームとイスラーム主義を混同する的是はずれの意見も若干は寄せられたが、イスラーム主義に偏りがちであった近年の研究状況を考えれば、スーフィズムというイスラームのもう一つのあり方を考慮に入れることで、より大きな枠組みでイスラームの現代を考えられるという問題提起は、それなりに訴えかけるところがあっただろう。

本セッションでの議論から生み出された課題はいくつかあるが、特筆すべきものとしては、Sedgwick や Kilic の発表に示唆された近現代スーフィズムの多様性への注目の必要がある。それはまた、東長の発表において示された、倫理に偏重した近現代スーフィズムと、イスラーム主義に代わるものとしての新しいスーフィズムの区別に関わるものでもある。前者のスーフィズムは、最初期スーフィズムへの回帰の姿勢を持つとともに、きわめて理性主義である点において、実はイスラーム主義に類似している。実際、小松が取り上げたドゥクチ・イシャーンの教えはそのようなものと聞こえた。これが意味するのは、近現代スーフィズムの中に、イスラーム主義と相似のあり方もそうではないあり方もあるということであり、「イスラーム主義」対「スーフィズム」ではなく、近代を体験したイスラームが、それまでの知の蓄積という伝統と近代とをどのように折り合わせようとしたかについて、より細やかな理論的枠組みが必要であることを示している。この課題が明確になったのも、本セッションの収穫であった。(赤堀 雅幸、上智大学)

【第2セッション】

第2セッションは、「宗教的権威の場とネットワーク」(Sites and Networks of Religious Authorities)というタイトルの下で、宗教的権威という場における知の体系的あり方が、時間的および空間的なネットワークの中でどう変容・伝播していくかについて、スンナ派イスラーム世界、シーア派イスラーム世界、そして中国の漢族ムスリム世界をそれぞれ取り上げ、比較対照を試みた。

最初の報告者の Jonathan Berkey は、2001年の9.11事件以降、メディアの関心を集めているパキスタンのデーオバンディー学派のマドラサと中世期スンナ派世界のマドラサの連続性と非連続性に思いをめぐらすことで、中世期スンナ派世界における教育や知識の伝播のあり方を比較的枠組みの中に位置付けた。Berkey は、中世期の教育や知識の伝播のあり方を特徴づけるものは、その informality (フォーマルな制度の欠如)であったと述べ、11世紀以降のマドラサの制度的発足による場の制度化は、教育内容の制度化(例えば、カリキュラムや学位の体系化)にはつながらなかった、と論じた。中世期においては、知は変化をもたらすものとは認識されてはおらず、教育の現場における師弟関係はヒエラルキー的であり、暗記(memorization)が知識の伝達の手段の役割を果たしてただけでなく、教育の目的でさえあった。これが、知のあり方自体を権威的システム(authoritative system)とし、またその「イデオロギー的枠組み」を強く革新を嫌うものにした。したがって、Berkey は、中世期の知のあり

方は保守的な性格をもつものであったと結論づけた。

それとは対照的に、19世紀インドのデーオバンディー学派のマドラサは、イスラーム教学において現代的な意味でのカリキュラムを恐らく初めて導入し、近代的な教育の概念（すなわち社会変革の動因としてのそれ）を体現するものであった、と論じた。その一方で、同学派の教育内容は、その他の復興主義運動と同様に、イスラーム理解の統一化（univocal化）の特徴、すなわちある「理想化されたモデルに基づくイスラーム理解」を普及させるという特徴をもつものであり、また「字義的解釈主義的」（scripturalist）でもあり、その意味では革新を嫌うイデオロギーを意図的に採用したものであった。

最後に、Berkeyは、近年のスナ派イスラーム世界における教育制度や改革についての研究成果は伝統と近代、宗教と世俗等の、近代化論者の二項対立的な枠組みの誤認を確認するものであると述べ、誰が宗教についての知の権威をもつ者であるのかという根本的な問題を含めて、近代のマドラサはさまざまなジレンマを抱えていることを指摘した。

2番目の発表者の佐藤実は、17世紀南京に始まった中国の漢族ムスリム知識人（回儒）の思想が、いかに中国思想史の枠組みの中で発展したものであったかを、劉智 Liu Zhi の五元論 Five-Element Theory を取り上げることで、明らかにした。佐藤はまず、明朝後期および Qing 朝初期における五元論を説明し、次に、劉智に先行する漢族ムスリム知識人である王岱輿 Wang Daiyu および馬注 Ma Zhu の五元論の議論を検証した。劉智が、これらの2人の先行する漢族ムスリム知識人と異なり、五元論を、おりしも西欧から伝わってきた四元論 Four-Element Theory と折衷させることにより、自然界の現象を万物の創造のプロセスとして解き明かしたこと、また、ムスリムの五柱とも関連づけていったことをその著作である Wugong shiyi（五功釋義）に基き、ていねいに跡付けた。結論として、中国思想、西洋思想、イスラーム思想が17世紀という時代に、回儒の思想のなかで発展的に融合していることを明らかにした。

3番目の発表者の Mohsen Kadivar は、12イマーム・シーア派イスラーム教学における大法学者のひとりであり、Akhond Khorasani の名でも知られる Molla Mohammad Kazim Khorasani（1839-1911）を取り上げ、今までほとんど知られていなかった Khorasani の政治理論についての独自の研究の一端を発表した。

Kadivarによれば、Khorasaniは、12イマーム派の法学者の間で初めて、絶対的ヴェラーヤの権限（絶対的統治権）を神にのみ限定し、預言者と無謬のイマームについても、そのヴェラーヤは、啓示法の枠内に留まると論じた。イマームの幽隱の時代においては、本来の12イマーム・シーア派の政治理論では、正当な政治権力はないとされていたが、イランにおいては、サファヴィー朝およびガージャール朝期において、2つの解決法が考案された。その一つは、統治者が啓示法を尊重し、宗教に関わる事項におけるイスラーム法学者の権威を認めるなどの条件を満たす場合には、イスラーム法学者の許可なく権力を獲得してもよいとした。もう一つの解決法は、条件を満たしたイスラーム法学者

が、不特定代理人の原理に基き、直接社会を統治すべきであるが、社会の繁栄のためにその権限を別のムスリムの統治者に委譲できるとのものである。後者が果たして正しい説であるかがイラン立憲革命期(1905-1911)の一大問題となったが、これについて Khorasani は、正当な統治(hokumat-e mashru'eh)を預言者と無謬のイマームに限定する一方で、非正当な統治を公正なもの('adeleh)と、圧政(zalemeh)にわけ、イスラーム法学者の許可を得た立憲体制は前者に当てはまるとした。すなわち、Khorasani はサファヴィー朝期以来の定説を退け、イマーム幽隠期においては、公正さが統治の正当性に関して重要な基準となるとの理論を展開した。

社会の統治に関して、イスラーム法学者が特別の権限を持つかどうかという問題について、Khorasani は、Ahmad Naraqi (1764-1824) や Hasan Najafi とは意見を異にし、彼の師である Morteza Ansari (1793-1860) と同様に、社会の公的領域の管理に関しイスラーム法学者が特別の権限を持つとの説は根拠不十分であるとの見方をとった。Khorasani は、立憲革命期のマルジャエ・タグリードとして、正義を追求し専制と闘うことは宗教的義務であると論じたが、これをイスラーム法学者の統治権から論証せず、「善を命じ、悪を禁ずる」という原則から論証した。

Khorasani はまた、イマーム幽隠期においては統治者の権限を制限することが、イスラームにおいて必須であると見なし、宗教においても絶対的権力をもつことは、無謬のイマームの場合を除いて逸脱(bid'ah)であると論じた。Kadivar は、イスラーム法学者の絶対的統治権をこれほど強く否定したのは、Khorasani が初めてであったと論じた。Khorasani はさらに、ヒスピーヤ事項においても、孤児の庇護監督においても、イスラーム法学者に特別の権利を認めなかった。その意味では、Akhond Khorasani は、イスラーム法学者の統治権に関する立場において、Ruhollah Musavi-Khomeini (1902-1989) の対極に位置すると、Kadivar は論じた。Kadivar は、最後に、Khorasani の説は、全てのムスリムが公的領域の管理に参加することを許すものであり、その立場は彼の「イマーム・マフディーの幽隠期においては、政府は公衆に属する」との歴史的定式化に表れていると述べた。その上で、Kadivar は、この表現こそが、イスラーム社会における民主体制(democracy)の基盤となるものであると結論づけた。

第4番目の発表者佐藤紀子は、2003年のイラク戦争後のイラク社会において、ホイ財団(Mu'ssasat al-Imam al-Khoei al-Khairiyya)がシーア派イラク国民の間でネットワークを築いていくための困難さを、社会人類学者の目からまとめた発表を行った。佐藤は、2003年4月10日にナジャフにおいて暗殺された Sayyid Abd al-Majid al-Khoie は、大アーヤトツラーであった Abu al-Qasim al-Khoie の子息であり、有力な聖職者家系の出身であるが、他のイラクにおけるシーア派聖職者のエリートと同様な弱点をもっていたと論じた。佐藤によれば、その弱点とは、イラク社会の社会的および階層的な亀裂の存在の故に、彼らがこれらの社会的境界を越えて、一派信徒と自らの間の効果的な結びつきを確立するこ

とができないからであるという。さらに佐藤は、シーア派コミュニティー内部の政治的なライバル関係の問題や、政治的イデオロギーにもとづいた動員との競争など、ホイ財団が現在直面する問題について言及した。

それぞれの発表後の質疑応答には、以下のようなやりとりが含まれた。まず、Berkey に対しては、教育といってもエリート養成のためのものと、大衆教育のものでは意味合いが違うが、この観点から、中世期のマドラサと 19 世紀以降のマドラサをを連続的に比較し、論ずることには問題はないのかという質問や、宗教と世俗の領域を区別することは西欧の啓蒙主義以降のものであると断じていたが、Kadivar の発表にもあったように、伝統的なシーア派イスラーム法学者の議論の枠組み宗教の領域と非宗教の領域を区別はあるが、それとはどう議論を整合させるのかという問いがでた。しかし、Berkey の議論でもっとも活発な反応を呼んだのは、はたして中世期のマドラサでの教育はそれほど記憶という行為に支配されるものであったのかという点であった。これについて、幾人かの参加者より異論が出された。

Kadivar に対しては、Khorasani がヒスピーヤ事項について、イスラーム法学者である必要はなく、「賢いムスリムや信頼のおける信仰者」がその役割を果たせばよいとしたとされていたが、Khorasani によれば誰が「賢いムスリム」と見なされるのかという質問や、Khosarani が論じているウィラーヤの概念には、wilayah takiwiniya と呼ばれるものは含まれないのかとの質問がでた。後者については、Kadivar は、wilayah takwiniyah は、神秘的なウィラーヤと呼ばれるものであり、神と預言者・無謬のイマームについてのみ使われる概念であり、Khorasani の議論の社会の統治に関わるウィラーヤは、その対概念である wilayah tashri'iyah に関わるものであるとの説明がなされた。また、Khorasani の議論のイスラーム・デモクラシー論への貢献に関連して、彼の議論と世俗主義とののかかわりについても質疑が交わされた。

セッション全体としては、それぞれのペーパーが扱った主題間における直接の結びつきが薄かったことが、発表者間や参加者をも含めた議論のより活発な展開にややブレーキをかけた側面が感じられた。しかしながら、様々なセッティングにおけるイスラームの知と宗教権威のあり方に関わる 4 つの発表を通じて、いかに主題にアプローチできるか、またそれをいかに論じることがよいのかについて、thought-provoking で有意義なセッションが持てたと思う。

(松永 泰行、日本大学)

【第 3 セッション】

第 3 セッション New Thinkers in Islam : Intellectual Map of Contemporary Muslim World では、4 本の報告がおこなわれた。まず、中田考(同志社大学)の報告では、イブン・タイミーヤの思想が分析され、またそれが現在どのように受容されているかが検討されて、西暦 14 世紀に生きたこの法学者の思想が、「(「タウヒード」の理解、シャリーアから逸脱した統治者に対する「ジハード」

という概念など)現代のムスリムたちの思想や行動にいかにか絶大な影響を与えているかが明らかにされた。ついで、Abou Elela Mady の発表(航空機が悪天候で欠航したため、京都大学の小杉泰教授による代理発表)では、自らもイスラームに基く政治的・社会的実践を志す現代エジプトの知識人としての立場から、伝統的なイスラームの政治理論に対して批判的検討が加えられ、ついで近年エジプトで結成されたワサト(「中道」)党の思想や活動を紹介する形で、(宗教・宗派の別を超えた)「市民権」の概念、女性の権利等の概念が、イスラームと矛盾するものではなく、むしろイスラーム自体のなかから導き出されるものであることが示された。第三の Mohamed A. Mahmoud の発表では、1960年代のスーダンで知識人のあいだに大きな影響力を持った思想家マフムード・ムハンマド・ターハーの思想が、そのスーフィズムの背景に根ざす独特の個人主義的特徴、またメッカ啓示とメデイナ啓示の相違に関する理解等を中心に分析された。最後に、Ulil Abshar Abdalla の報告では、現代のムスリムたちによってイスラームがひとつの「政治イデオロギー」として捉えられていること自体が「西洋の衝撃」の結果であり、あくまで近代の所産であることが指摘され、「神主権 hakimayya Allah 」概念が近代になり「創造」されたものであること、「シャリーア」とは何かをめぐる議論は多義的であり得ることが論じられた。

以上の報告をめくり、活発な質疑応答がおこなわれ、(1)イブン・タイミーヤをどのような存在として位置付けるのか、(2)「政治的イスラーム」を近代の所産、イスラームにとっては異質な現象と言い切れるのか(たとえば「神主権」概念の原型は古くから存在するのではないか)、(3)「政治的イスラーム」が失敗しているとするならば、その原因は何か(弾圧のゆえか、内在的問題か)、(4)マフムード・ムハンマド・ターハーの思想や「ワサト党」の出現の背景は何か、などの論点が出された。さらにその後の総合討論の中では、「シャリーアとは何か」をめぐる議論・模索が、イランのシーア派思想界のなかにも存在することが指摘された。

総じて第3セッションの報告はいずれもきわめて刺激的であり、イスラームとは何か、「シャリーア」とは何か、あるいは「個」の自由や「市民社会」のあり方をめぐって、今まさにムスリムたちの間で真摯な議論・模索がおこなわれていることを実感させるものであったと考えられる。(栗田 禎子、千葉大学)

JAMES International Workshop: Changing Knowledge and Authority in Islam
Program

<March 25th, Thursday>

13:30-13:40 Opening Address:

SATO Tsugitaka (Organizer, Waseda University, Tokyo)

KOSUGI Yasushi (President of JAMES, Kyoto University, Kyoto)

Session 1 13:45-17:00

Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence

Chair: AKAHORI Masayuki (Sophia University, Tokyo)

TONAGA Yasushi (Kyoto University, Kyoto), “Sufism in the Past and Present”

Mark SEDGWICK (American University in Cairo, Cairo), “Tariqa and Reform and Tariqa Reform in the Arab World”

Mahmut Erol KILIC (Marmara University, Istanbul), “Sufism in Contemporary Turkey”

KOMATSU Hisao (The University of Tokyo, Tokyo), “Islamic Resurgence and Tariqa in Central Asia”

Discussion

Discussants: KISAICHI Masatoshi (Sophia University, Tokyo), IIZUKA Masato (Tokyo University of Foreign Studies, ILCAA, Tokyo)

Welcome Party 18:00-20:00

<March 26th, Friday>

Session 2 9:30-13:00

Sites and Networks of Religious Authorities

Chair: MATSUNAGA Yasuyuki (Nihon University, Tokyo)

Jonathan BERKEY (Davidson College, Davidson), “The Transmission of Knowledge and Religious Authority: Medieval Institutions and Modern Problems”

SATO Minoru (Kanazawa University, Kanazawa), “Knowledge and Tradition of Chinese Muslim Intellectuals”

Mohsen KADIVAR (Tarbiyat Modarres University, Tehran), “The Innovative Political Ideas and Influence of Molla Mohammad Kazim Khorasani”

SATO Noriko (Durham University, Durham), “Religious and Political Networks: al-Khoei Foundation and Other Political Minorities”

Discussion

Session 3 14:10-17:30

New Thinkers in Islam : Intellectual Map of Contemporary Muslim World

Chair: KURITA Yoshiko (Chiba University, Tokyo)

NAKATA Koh (Doshisha University, Kyoto), “The Influence of Ibn Taymiyya's Thought in Contemporary Islam”

Abou Elela Mady (International Center for Studies, Cairo), “A Model of Islamic Political Thinking in Egypt,” read by KOSUGI Yasushi (Kyoto University, Kyoto)

Mohamed A. Mahmoud (Tufts University, Birmingham, UK), “Mahmud Muhammad Taha and the Crisis of Modern Islam”

Ulil Abshar Abdalla (Institute for Research and Human Resource Development of

Nahdlatul Ulama, Jakarta), “The Liberal Interpretation of Islam: The Indonesian Case”

Discussion

General Discussion 17:30-18:00

Discussant: Dwight F. Reynolds (University of California, Santa Barbara)

Organizing Committee: SATO Tsugitaka (Organizer, Waseda University), KURITA Yoshiko (Chiba University), MATSUNAGA Yasuyuki (Nihon University), MIURA Toru (Ochanomizu University), SAKAI Keiko (Institute of Developing Economies), Dwight REYNOLDS (University of California, Santa Barbara), TONAGA Yasushi (Kyoto University)

Sponsored by Japan Foundation

第 8 回公開講演会「中東における紛争と平和構築」

日本中東学会は、本年度も文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、公開講演会を開催いたします。テーマは「中東における紛争と平和構築」で、3人の学会員の方々にそれぞれパレスチナ問題、イラク問題、アメリカの論理（中東政策）についてご講演をいただく予定です。一般に中東は、冷戦期・ポスト冷戦期を通じて戦争・紛争が頻発する「危険地帯」と考えられてきました。2001年9月の米国同時多発「テロ」事件以後はさらにアフガニスタンとイラクでの戦闘、またパレスチナ問題の動向が世界の注目を集めています。この講演会では、今日の中東で「対テロ戦争」の主要な舞台にされてしまった観のあるイラクとパレスチナに焦点を当て、「対テロ戦争」を推し進めるアメリカの論理をも参照しつつ、問題の原因や経緯、現状と課題をそれぞれの専門研究者が分析・考察していきます。また、単なる情勢分析にとどまらず、中東地域の平和構築に向けた提言まで行っていければ、と考えております。講演後には質疑応答と討論を通じて、パレスチナやイラクで起きている事態を「紛争」ととらえることの是非も含め、議論を深めていくつもりです。

会場は交通の便が良い都心にあり、最大500人を収容可能です。会員の皆様には奮ってご参加いただくとともに、学生・院生・同僚の方々などに本講演会の情報をお知らせいただければ幸いです。（企画担当 飯塚正人）

* * *

第 8 回公開講演会「中東における紛争と平和構築」

日時： 2004 年 10 月 30 日（土） 午後 1 時 20 分～4 時 45 分
（開場 午後 1 時 10 分）

場所： 一橋記念講堂（学術総合センタービル内）
〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2(地下鉄「神保町」S06,
I10, Z07 または「竹橋」T08 下車)

講演者： 酒井啓子（日本貿易振興機構アジア経済研究所参事）
立山良司（防衛大学校教授）
高橋和夫（放送大学助教授）

アジア中東学会連合（AFMA）第 5 回韓国大会について

アジア中東学会連合（AFMA）の第 5 回大会が、2004 年 10 月 15～17 日にブサン（韓国）において、Islam in Asia をテーマに韓国中東学会の主催で開催されます。この大会は、2 年ごとにアジア中東学会連合の構成団体である韓国、日本、中国の 3 学会が交代で主催しています。大会では、上記テーマでの研究発表と AFMA の役員・事務局の改選などが行われます。

今回の大会から、AFMA の大会も役員担当もローテーションの 2 廻り目に入ります。昨 03 年には、北米中東学会（MESA）アンカレジ大会において、「東アジアの中東研究」についてのセッションが行われたように（ニューズレター 95 号参照）、世界規模での中東研究の交流が活発になり、そのなかで東アジアにおける研究が注目されています。主催の韓国中東学会では、構成団体に加えて、タイやモンゴルなどアジア諸国からの研究者を迎え、「アジアにおけるイスラーム」について研究交流を積極的に行う構えでいます。

このような機運をふまえ、日本中東学会理事会および国際交流委員会では、次のような着眼点から、研究者の派遣と意見交換を行うことを提起し、国際交流基金に対して派遣費用の助成申請を行う予定です。

「東アジア諸国と中東・イスラーム諸国との関係の現在・将来を考えるときに、外交・経済政策とともに、中東地域やイスラームについて、メディアや教育を通して提供される情報や知識、形成されるイメージや認識が大きく作用している。韓国・中国・日本における中東・イスラームをめぐる policy, media, education の 3 つの関係を、具体的な事例を提示しながら検討することにより、AFMA 加

盟3カ国が、それぞれ立脚している中東・イスラームをめぐる研究環境の違いと共通性を認識するとともに、中東や東アジアのムスリム諸国からの研究者をまじえ、多方向の議論の交流を行う。」

テーマ例としては、

- 1 - 中東・イスラーム諸国との外交・経済関係
- 2 - 中東・イスラームに関するメディアの報道とイメージ
(パレスティナ問題、イラク戦争、東アジア地域のムスリムなどについて)
- 3 - 中東・イスラームに関する教育や研究の歴史と現在

上記のテーマに関連して、研究発表を行う方を募集いたします(発表言語は原則として英語)。発表を希望される方は、7月5日までに発表タイトル(仮題、英語)を、国際交流委員会宛にお知らせください。

【国際交流委員会連絡先】

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学文教育学部
三浦徹研究室 日本中東学会国際交流委員会
TEL & FAX 03-5978-5184 E-mail: james@cc.ocha.ac.jp

AJAMES 第 20-2 号投稿原稿の締め切りについてなど

去る5月8日に開催された本年度第1回編集委員会で検討された結果について、以下、報告申し上げます。

第20-2号投稿原稿の締め切りについて

今年度第二号の20-2号の締め切りは、8月末日とさせていただきます。編集作業の参考のために、投稿ご希望の方はご一報ください(もちろん、前もってのご連絡がなくても投稿は歓迎いたします)。投稿原稿の種類は、論文以外にも研究ノート、書評論文、資料紹介、研究動向、書評などがありますので、ぜひ積極的にご投稿をお願いします。投稿に際しましては、投稿規程をよく読んでください。疑問点がありましたらお気軽に編集委員会までお尋ねください。

第19-1、19-2号の刊行について

昨年度、当初の計画通りに二つの号を刊行することができました。それぞれ英文による小特集を組むことができました。「一般欧文雑誌」として科学研究費補助金(研究成果公開促進費)助成を受けており、総頁数に占める欧文比率を50%以上にする必要があったわけですが、おかげさまで昨年度の二号全体の欧

文比率は、前年度を上回る 70%でした。このためか今年度は、昨年度より多い 120 万円の補助金を受けることができました。ご協力ありがとうございました。

編集委員の交代について

昨年度末をもって、岡野内正（9 年目）、酒井啓子（7 年目）、吉村慎太郎（7 年目）の各委員が退任し、本年度から新編集委員として、青山弘之、松本弘、水島多喜男の各氏に加わっていただきます。前編集長の岡野内氏をはじめ、長い間ありがとうございました。

第 20-1 号の編集について

本年度第一号の第 20-1 号は、9 月末の刊行を目指して現在作業を進めております。同号では、加藤博氏を取りまとめ役をお願いして「比較史のアジア：市場社会の類型論」という小特集を組む予定です。今回も多くの投稿原稿をいただき、大会第 1 日に編集委員会を開き検討いたしました。投稿者ならびに査読者の方々ありがとうございました。

第 20-2 号以降の編集計画

冒頭で紹介しましたように、本年度第二号、第 20-2 号の投稿原稿の締め切り時期を昨年度より早め 8 月末日とさせていただきます。と申しますのは、例年 3 月末刊行を予定しますと、印刷所の仕事が混み合う年度末になかなか難しい状況があるからです。この点をご理解いただき、締め切り時期をできるだけ守っていただくようお願いいたします。9 月に査読、10 月初めに編集委員会、11 月中旬までに修正原稿を戻して、12 月に入稿を開始、2 月末には刊行の運びとしたいと予定しております。

第 20-2 号の特集企画は、長谷部史彦氏に取りまとめ役をお願いし、「前近代アラブ都市の民衆運動と政治文化」を予定しております。

来年度第 21-1、21-2 号の特集としては、今のところ 3 月に開催した中東学会国際ワークショップ「イスラームの変容する知と権威」や 2005 年 3 月開催予定の世界宗教学宗教史会議の中東学会関係者セッションなどを考えております。その他、小特集の企画をお持ちの方はぜひ編集委員会までお知らせください。

また、新コーナーとして、第 19-1 号から Middle East Studies in Japan を始めましたが、第 20-2 号以降、学界紹介記事として、狭い意味での中東以外の地域についての研究活動を紹介する Islamic Area Studies in Japan（仮題）というコーナーを作る企画を立てております。

本誌は、日本の中東研究の水準を引き上げ、その成果を国際的に発信するとともに、海外の研究者との交流の場となることを目指しております。しかし同時に、こうした志の高いミッションとともに、多くの会員にとって読みやすく、また読み応えのある学会誌のあり方も追求しなくてはいけないと考えております。本誌を支える会員の皆さまからのご助言やご提案を今後もお願いする所でございます。

（編集委員長 長沢 栄治）

「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」の 編纂事業について

平成 15 年度文部科学省科学研究費（研究成果公開促進費）の助成をえて、上記データベースを日本中東学会ホームページにて公開中です。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/database.html>

昨年、業績アンケートにご協力くださった会員の皆様の業績は上記データベースに掲載されており、現在、約 5,000 件のデータを収録しています。さらに本データベースを拡充するために、ホームページ上より、オンラインにて業績を登録できるようにいたしました。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/entrydata.html>

新規業績をこのホームページから入力いただければ、随時、新規業績として HP に掲載するとともに、上記「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」に登録掲載いたします。

平成 16 年度は、引き続き科学研究費補助金の内定（350 万円）がありましたので、次の形で業績データの調査収集を行い、本データベースを完成させたいと考えております。

- (1) 学会会員への業績アンケートの追加調査（新規入会者や未回答の方に、アンケート調査を発送・回収）
- (2) 日本オリエント学会、日本イスラム協会の協力をえて、同学会会員の業績のアンケート調査

また、英語版（本文が外国語または外国語レジュメ付の文献）も本学会ホームページに公開し、国外からのアクセスが容易にできるようにいたします。

本データベースが広く普及利用されるように、学生や大学院生、教員や一般の方々へご紹介いただけるようお願い申し上げます。

【業績送付先】

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学文教育学部

三浦徹研究室内 DB 編集係

TEL & FAX 03-5978-5184 E-mail: james@cc.ocha.ac.jp

学会への入会希望者がおられましたら、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームのダウンロードもできますので、ご利用ください。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

寄贈図書

【単行本】

大川玲子『聖典「クルアーン」の思想 イスラームの世界観』講談社、2004.

【逐次刊行物】

『季刊アラブ』vol.108、2004、日本アラブ協会.

『平成 15 年度第 11 回西アジア発掘調査報告会報告集：今よみがえる古代オリ
エント』2004、日本西アジア考古学会.

2005 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。年次大会の折に 2005 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方は、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されていますのでご利用ください。2004 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払いください。払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

事務局より

・国立民族学博物館地域研究企画交流センターが事務局を引き受けて 2 年目に入りました。折り返し地点にたったわけです。明治大学での第 20 回年次大会も盛況のうちに終了しました。来年度の年次大会は日本中東学会創立 20 周年を記念して松原正毅実行委員長のもとで国立民族学博物館において開催されます。日本中東学会も人間でいえばようやく「成人」したわけですが、会員数も 600 人を超えるまでに成長しました。

ところで、今年度の総会でも承認されましたが、今年度予算から大会会場費が計上されることになりました。年次大会を開催するにあたって会場費を支払わなくてはならない場合が増えてきたからです。国立大学および大学共同利用機関も今年度から法人化されましたので、今後、私立大学ばかりではなく、大学法人等で年次大会を開催する場合も必要となってくると思います。今年度の明治大学での年次大会が最初のケースとなります。

今期理事会から理事による職務の分掌体制が導入されましたが、新たな体制も各理事のご尽力により順調に機能しています。もちろん、国際交流や AJAMES の編集などは一塊の仕事量としては多く、ハードなものですが、かなり充実し

ていると評価することができると思います。

会員の皆さまには事務局に対してさまざまなご意見・ご感想をお持ちだと思います。忌憚のない建設的なコメントなどを事務局までお送りください。今後の事務局運営の参考にさせていただきます。(臼杵 陽)

・AJAMES 第 20-2 号(春号)の投稿締め切りが例年より 1 ヶ月早くなるのお知らせが掲載されていますので、投稿予定のある方は 35~36 ページをご覧ください。

・今年 10 月韓国で開催予定の AFMA 第 5 回大会における研究発表の募集についてもお知らせがあります。ご関心のある方は 34~35 ページをご覧ください。(発表仮題の申請期限まであまり時間がありません！)

日本中東学会ニューズレター 第 98 号

発行日 2004 年 6 月 21 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 中西印刷

日本中東学会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
国立民族学博物館
地域研究企画交流センター気付
TEL & FAX 06-6878-8367
E メール：james@idc.minpaku.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座：00140-0-161096
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808